

15) アシ=葦

アシはイネ科の多年草で日本各地の川や湖、入り江などの水辺に群生し、世界では温帯から暖帯にかけて広く分布する。根茎は地中をはい、地上の茎は緑色の円柱形で直立し、高さ 2~3m に達する。また茎は分枝することなく、葉は細長く縁はザラつき互生する。秋、茎の先に細かい花を無数につけて穂状となり、この花穂は紫色から後に褐色となる。若芽は食用になり、茎は葦簀(ヨシズ)や簾(スダレ)の材料に用いる。和名の起源は「初め」を意味する「ハシ」が転じたとも、水深の浅いところに生えるため「浅し」が転じたとも、田圃になっていないという意味の「荒らし」が転じたもの、などという説もある。確かにアシは入り江などにもよく生え、有明海の干拓地などでは海水を抜いた後、アシを何年か植えて塩分を中和させ、水田として利用している。また『記・紀』神話に登場する、『豊葦原瑞穂国』(トヨアシワラミズホノクニ)に由来するとも、葦が萌え出るように生まれた神として伝えられている『可美葦牙彦舅尊』(ウマシアシカビヒコジノミコト)によるとも言われている。井上光貞先生の『日本書紀』によれば、「むかし、国が若くおさなかつたときには、それはちょうど膏(アブ)が水に浮かんだように漂っていた。そのとき、国の中に物が生まれた。その形はアシの芽がもえ出たようであった。これによって化(け)りいでた神がある。その神を『可美葦牙彦舅尊』という。」と記されている。さらに『古事記』によれば伊那那岐命と伊那那美命が婚(マグワイ)をして最初に生まれた子は水蛭子(ヒルコ)だったので、葦船に入れて流し、次に生まれたのが淡島だったと記されている。当事、既に葦船が存在していたのである。違った見方をすれば、日本人と葦の歴史はそれほど古く、またそれほど深かったのだろう。別称として『アシ』は『悪し』に通じるところから縁起が悪いとして、『ヨシ』ともいわれ、これは『梨』を『アリ』といったのと同じである。この他にもヒムログサ、ハマオギ、ナニワグサ、スゴロなどさまざまである。またアイヌ語ではサロマブと呼ばれており、これはサロマ湖の語源にもなっている。学名は『*Phragmites communis*』で、属名はギリシャ語の *phragma*=垣根に由来し、種小辞は英語の『common』である。イギリスでは『reed』と呼ばれ、管楽器のリードはアシで作られている。また中国では『蘆』と呼ばれ、漢方では葦の根茎を『蘆根』(ロコン)といい、煎じて利尿、止血、解毒、吐き気止めなどに用いる。

人間が利用した植物の中でアシは最も古いものの一つである。『古事記』には前述のごとく『天地開闢神話』(テンチカイビヤクシンワ)に登場して、「射出づる矢、葦の如くに來たり散りき」とも記されている。『万葉集』ではアシを詠みこんだものは 50 首にも及び、葦と表記するほかに『安之』『葭』『蘆』『阿之』などと表わされている。中でも有名なのは次の 2 首であろう。志貴皇子(シキノミコ)は

葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて 寒き夕べは大和し思ほゆ

と詠っており、「羽がひ」は鴨の背中の羽の交わる部分で、そんなところに霜が降りる

わけもないのだが、寒さを強調したかったのだろう。もう一つは山部赤人の歌で

和歌浦に汐満ち来れば潟を無み 葦辺をさして鶴(タヅ)鳴きわたる

というものである。和歌の浦に汐が満ちてくると干潟がなくなるので、葦の生えているあたりに、鶴が鳴きながら飛んで行く、という意味である。ともに鶴や鴨といった鳥との組み合わせで詠っている。この他、難波潟と葦との組み合わせも多く、葦田鶴(アシタヅ)という言葉は鶴の異名ともなっている。また『枕草子』にも「草の花は」(64段)の中に「葦の花」として登場する。

ヨーロッパでも人間とアシの歴史は古く、物語にしばしば見られる。しかしこれが日本のアシと同じものであるかは疑わしい。エジプトでも紙の原料パピルスはアシによく似ており、しばしば混同されている。しかしこれはイネ科ではなくカヤツリグサ科で、当時はそうした区別がなかったのだろう。葦船もアシではなくパピルスだった。以下、ここに紹介する物語にもそうした間違いがあることをご承知置き願いたい。

前置きはさておきエジプトの神話では、豊饒の女神イシスが太陽神であり夫でもあったオシリスの死体を取り戻そうと、パピルスを編んで船を造り、ナイル川に船出したが、パピルスを尊敬していたワニも、この船の進行を妨げることはなかった。またモーゼは生まれてまだ三カ月であったが、パピルスで編んだ籠の舟に入れられ、イグサの茂みに浮かべられていた。このときイグサはモーゼの頭上に輝いて、モーゼが将来人々の指導者として、高い地位に上りつめることを暗示していたという(02-02-07 アカシアの項参照)。アシもイグサもパピルスも、人間にとって極めて有益な植物だったために、このような英雄伝と、いつしか一つになって語られるようになったのだろう。

ヒンズー教徒の間でもアシに似たスズメガヤ科のクシャが神聖な植物とされている。その昔ブラフマはこの草の上に座って瞑想に耽ったといわれ、このためクシャは魂を浄化すると考えられるようになり、祭壇の香の火にくべて、その煙のなかでブラフマ、ヴィシュヌ、シヴァの三大神を祭るようになった。ヒンズー教徒の間ではクシャを床に撒いて、その葉を身に付けてお守りにするようになったのである。

葦の名前は聖書でもあちこちに見られ、『旧約聖書』の「列王紀下」では、エジプトを折れかかった葦の杖のようで頼りにならないと記述され、『新約聖書』の「マタイによる福音書」には、しばしば葦が登場する。第12章では「彼が正義に勝ちを得させる時まで、いためられた葦を折ることなく、煙っている燈心を消すこともない」と語られ、第27章の十字架に磔られる直前の場面では、十字架にかけられたイエスに対して、「すると彼らのうちの一人が走りよって、海綿に含ませた葡萄酒を葦の棒に取り付けて、イエスに飲ませようとした」と記述されている。またこのときイエスが、釘を打たれた両手に握られていたのも、アシであったことはよく知られている。同じく『マタイによる福音書』第13章に記されている「人々の眠れる間に仇がやって来て、麦の中に毒麦を蒔いて去った」と言われる「毒麦」も、アシと近縁の種であるという。

一方ギリシャ神話では、ミダス王の理髪師が地面に穴を掘って王の秘密を喋り、そこから生えてきた葦が「王様の耳はロバの耳」と喋るようになり、以来ヨーロッパでは風に吹かれてアシが騒ぐのは、ミダス王の秘密を囁いているのだといわれてきた。また茎が中空であるために、古くから笛などの楽器として利用されている。牧神パンに追われた妖精シュリンクスはアシに変身したために、パンはこのアシを刈り取って葦笛を作ったとされている。これがパンフルートという楽器の由来でもある。

イギリスではウェールズの迷信で、イネ科の草むらには妖精が棲んでおり、注意しないと仕返しされると語り継がれてきた。イネ科の間には繁殖力が極めて強く、抜いても抜いてもあつという間に繁殖してしまう植物も多く、雑草類は農業の大敵であったために、このような俗信やさまざまな迷信が生まれたのだろう。

パスカルはその著『パンセ』の中で、「人間は自然のうちで最も弱い1本の葦に過ぎない。しかしそれは考える葦である。」と言った。彼はフランスの哲学者であったばかりか、理学や数学にも通じ、『パスカルの法則』といわれる理論を構築し、これは現在でも油圧機器の基本原則として利用されている。1662年に彼は39歳の若さで世を去ったが、死後1669年に『パンセ』が刊行された。この時代は新大陸が発見されて、英国やオランダが商権を争っていた時代で、近代国家が誕生し、世界の経済、社会、文化が最高潮に発展を遂げている真最中であった。

東京にあった遊郭「吉原」は、昔は現在の中央区日本橋堀留町付近にあった。当時このあたりはアシが繁る隅田川の河川敷で、葦の原を埋め立てて造成したものだったが、元和3年(1617年)幕府が、江戸市中に散在していた遊女屋を集めて出来た町である。このため「葦原」と俗称され、その後明暦3年(1657年)の『明暦の大火』の際、このあたりも炎上したため、現在の浅草山谷付近に移された。江戸の町が拡大する中で、新開地も次第に江戸市中に組み込まれるようになり、当時も遊女屋は市民から好まれなかったようで、更に郊外の隅田川べりに移されたというわけである。「葦の仮屋」といわれるものは葦で屋根を葺いた粗末な小屋のことで、葦を「刈る」と「仮り」をかけたものである。「葦の小屋」「葦の篠屋」も同じ意味で「葦の仮寝」は主に男女が、かりそめの一夜を過ごすことを意味し、平安時代の末期に編纂された『千載和歌集』には

難波江のあしのかりねの一夜ゆゑ 身をつくしてや恋ひわたるべき

という皇嘉門院別当の歌がある。また「葦の矢」は宮中で12月の大晦日に行なわれた『追難式』(ツイナシキ)に、桃の弓とともに鬼を払う呪いの道具として用いられた。

栃木県足利市の御厨神社(ミクリヤジンジャ)では1月14日に御筒粥(オツツガユ)神事が行われ、米と小豆にアシの茎を31本束ねて炊き、その年の豊凶を占う(08-01-12参照)。アシの筒の中に、どれだけ粥が入り込んでいるかで作柄を占うもので、同様の神事は諏訪大社春宮でも、また横浜市の熊野神社などでも行われている。熊野神社ではこれにご神木のナギの小枝(06-01-12参照)を加える。これこそが熊野信仰の系譜ともいえようか。



日本誕生の歴史にも関わりのあるアシは『記・紀』にも登場する(羽生市水郷公園)。



アシは日本史のみでなく西洋の歴史や物語にも登場する由緒ある植物である(羽生市水郷公園)。



水辺に茂るアシは鳥とのかかわりが深く、『万葉集』にも「葦田鶴」などという言葉を残している。鳥類や魚類には格好の住処を提供し、その繁殖にも大きな役割りを果たしている(羽生市水郷公園)。



アシが茂る水辺はカモにとっても憩いの場なのか、満席である(羽生市水郷公園)。 [目次に戻る](#)